

# 北村透谷の詩人論

——文学における「快樂」・「實用」の問題——

尾 西 康 充

## 序

北村透谷は山路愛山との人生相渉論争でつぎのようにのべている。

快樂と實用とは、文學の兩翼なり、雙輪なり、之なくては鳥飛ぶ能はず、車走る能はず。然れども快樂と實用とは、文學の本躰にあらざるなり。快樂と實用とは美的 (Ain) なり。美の結果 (Effect) なり。美の効用 (Use) なり。「美」の本躰は快樂と實用とにあらず。

『日本文学史賞』一八九三年)

文學の本質は「快樂」や「實用」にあるのではない、この主張は文學の目的性・有効性・実用性に関する一切の議論の地平を超越すべくなされたものである。その試みにおいて、透谷独特の文學の本質論が開陳される。透谷によれば、文學によって眞に人生を慰め、眞に人生を保つには、眞に人生を觀察し、人生を批評する√ことが必要である。△黙示の度に従ひて、人生を研究するものにして、感應の度に従ひて、人生を慰保する√△詩人√がそれを可能にすると考えられるのである。そこで、透谷の詩人論に着目しながら、彼の革新的な文學理念の問題を考究する。

透谷が活躍した一八八〇〜九〇年代はいかなる文學状況であつたのか。

日本近代文學の試行期といえる当時は、没理想論争(一八九一年)を代表とする多くの論争のなかで、文學が「快樂」か、あるいは「實用」か、そのどちらを指向するかについてさかんに議論がなされていた。そこで、文學における「快樂」と「實用」という問題に分析の視点を置いて、その時代の文學状況を整理する。

坪内逍遙の『小説神髓』(一八八六年)は日本最初の小説理論書と目されている。ここでは△小説は美術なり、實用に供ふべきものにあらねば、其實益をあげつらはむことなかなか曲ごととなるべし√としながらも△作者の敢て望まざりける裨益あるひは尠しとせず√と小説の効用を説いている。その直接の利益として△娛樂を人に與ふるにあり、間接の利益として△曰く人の氣格を高尚になす事、曰く人を歡奨懲誠なす事、曰く正史の補遺となる事、曰く文學の師表となる事√があげられている。ここでは△美術√に對置するかたちで△實用√がとらえられており、そのなかに△娛樂√という「快樂」が直接の利益として、さらに読者の啓蒙教化という「實用」

が間接の利益として含まれているとする。

ただし、逍遙のいう「娯樂」は、当時の文化改良主義的な意味合いにおいて用いられており、伝統的に「婦女童蒙の玩具」であった小説が「大人、學士といはるゝ人々」に「人間世界の批判をもて人生の一大娯樂」として読まれるときに得られるものとされている。つまり、それは読者への啓蒙とともにあたえられる「快樂」なのである。要するに『小説神髓』では「快樂」も「実用」も啓蒙主義的傾向をもつものとして包括的に規定されるのである。

ところで、その『小説神髓』におけるの大きな問題は、「美術」と「裨益」との関係のあいまいさである。小説は「人情」が作者によって「只傍觀してありのままに模寫」されるだけの純粹な美術であるといながら「若しそれ小説にして實にかくのごとき裨益ありなば、わが未熟なる小説、稗史を次第に修正改良して、彼の泰西のものに駕すべき完全無缺のものとなして國家の花と稱へつべき一大美術となさざらむはわが大なる懈息ならずや」としている。作者の一切の趣向を破棄して描かれる没理想小説において、没理想的な美を純粹に指向しながらも、その下位目的として啓蒙主義的要素を設定しているのである。両者の関係があいまいなまま、そのふたつが同時に実現可能であるとすると「小説神髓」の論理的矛盾があるのである。

事実、明治の文学において『小説神髓』理論の実践は成功を収めなかった。のみならずその後、反動現象まで引き起こし「此の當時の小説界——人情世態の描寫のみを本旨とした『小説神髓』直傳の文壇文學、インテリ文學——に對して殆んど革命的な爆發」と柳田泉氏が指摘した、矢野龍溪の『浮城物語』が読者に歓迎されて登場

するのである。

柳田氏の整理によると、龍溪の批判は『小説神髓』の脈を引いた当時の文壇小説が「世態人情の描寫といふその描寫を小説の本質とし、従つて讀者の悦ぶやうに作をす」とかいふことは考へず、作家が主で讀者が従、讀者は何でも作家の描寫したものをそのままに受け入れなければならぬところをついている。だから、作家は「先づ結構の壯大、變化の奇幻等、大衆の讀者も直に理解出来るやうな條件を備へたものを第一に制作」しなくてはならない。「國民が憧憬しつゝも實際の世界に於いて具現し得ない理想的満足を、空想の世界を假りて實現して見せ」ることによって「大衆の讀者にアツピール」するのが龍溪の目標とする小説であったと柳田氏は指摘している。

ここで注意しなければならないのは『浮城物語立案の始末』(『國民新聞』一八九〇年、六、二八)で「讀者に娯樂を與ふるは小説の正産物なり世を矯め俗を激し人を戒め時を諷するはその副産物なり」と龍溪が記していることである。越智治雄氏が指摘したように『経国美談』前篇序(一八八三年)に記されている「稗史小説ノ世ニ於ケルハ音楽書圖ノ諸美術ト一般、尋常遊戯ノ具ニ過キサルノミ」という認識が龍溪にあり、逍遙が提唱するノベルのみならず自らの政治小説さえ「正史」に「實事」に關する文章と対立する「遊戯ノ具」に過ぎないのである。小説による啓蒙主義的な目的意識は希薄で、読者に「快樂」をあたえれば小説の任務は全うされる。ただ、その「快樂」が人情小説的な悲劇的恋愛にとどまるものではなく「偉人奇士の風神態度」をもった英雄が登場して読者を戦慄、興奮させるところに龍溪の文学論の主眼が置かれている。その基本路

線に沿って知識の伝達が可能なかぎりなされればよいと消極的に考えられているのである。

しかし、政治小説たる『浮城物語』が啓蒙主義的な目的ではなく「快楽」をその主たる目的に設定することに矛盾はありはしないか。啓蒙家を称するにもかかわらず、龍溪は、読者からの「快楽」にたいする需要に応じることだけに小説の役割を認めるのである。そこに快楽主義的要素へのはなはだしい傾斜が指摘できよう。

すると、そのような龍溪の快楽主義的要素は、没理想的美を追求しながら同時に啓蒙主義的目的を達成し得るとした『小説神髓』の矛盾の解決策となり得たのであろうか。

これを考えるうえで注意を払わねばならないのは『浮城物語』をめぐって起こった浮城物語論争である。その論争の状況は、越智氏が『浮城物語』とその周囲<sup>(2)</sup>のなかで明快に図式化してみせたが『浮城物語』を大文学として積極的に肯定する徳富蘇峰・尾崎行雄らの啓蒙家たちとその登場人物の内面描写の不徹底さを非難する内田魯庵・石橋忍月らの文学者たちとのあいだでたかかわされたものである。しかし『浮城物語立案の始末』で「廣大無邊なる小説界を以て手狭なる菜園と誤想し、小説とさへ聞けば男女の情を寫すに止り快瀾壯大なる娯樂をば到底此界に望み難きなるが如く考ふ遺憾と謂はざる可けんや」と述べられているように、論点が「小説の領分」を以て人情一点張りとするか否かに終始した観がある。論争がそれ以上に発展せず、当時の文学状況を根本的に問うものにならなかった。その理由は、小説は所詮、快楽主義的要素しかもたないという前提に立って話をすすめている啓蒙家と、美と啓蒙的要素とが予定調和的に実現することを夢想している文学者との根本的な発想

の相違にあったのである。越智氏は「啓蒙家たちの志向した近代と文學的近代の斷絶、跛行、これが『浮城物語』の提起する問題なのである」と指摘している。

このように、両者のあいだにみられる差は歴然としていたのだが見逃してはならないのは、そもそも両者の文学観が「快楽」と「実用」とに関して大きな矛盾を孕むものであった点である。それゆえ、その状況の理論的な乗り越えを図るためには、その「快楽」「実用」を根本的に懐疑する眼をもつ必要があったのである。

それが可能であったのはだからか。それはまさに「神聖なる文學を以て、實用と快楽に隸屬せしめつゝありたり。宜なるかな、我邦の文運、今日まで憐れむべき位地のありたりしや」(『日本文学史骨』)と論じる視点を獲得していた北村透谷である。文學に一切の繫縛を断ち切れし「嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ」(『人生に相渉るとは何の謂ぞ』一八九三年)と高らかに宣言した透谷こそ当時の文學を根本的に問いなす可能性を発見できよう。

透谷のその可能性は、つぎに引くような彼の詩人論において際立ってみられる。そこで次章では、その詩人論をとおして透谷の可能性を考試する。

彼れは實を忘れたるなり、彼は人間を離れたるなり、彼は肉を脱したるなり。實を忘れ、肉を脱し、人間を離れて、何處にか去れる。社鵲の行衛は、問ふことを止めよ、天涯高く飛び去りて、絶對的の物、即ち Idea にまで達したるなり。

(『人生に相渉るとは何の謂ぞ』)

透谷が論じる詩人のもつとも重要な特徴は、インスピレーションに存する。透谷のインスピレーション概念は『内部生命論』（一八九三年）で述べられている。『内部生命論』は人生相渉論争をつうじて想実論を深化させた透谷の文学理念の到達点を示すものと評價されている。笹淵友一氏は△透谷個人の思想を解説するのみならず、「文学界」同人の思想を代表するものであつたことは、天知（論者注、星野天知）が「透谷ガ」内部生命ヲ説キテ本誌同人ノ思想ヲ明カニス」と述べてゐることも明らかである<sup>(3)</sup>としてゐる。

『内部生命論』によれば、インスピレーションとは△宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに對する一種の感應▽でありさらに△人間の内部の生命を再造する者▽△人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者▽である。その△再造せられたる生命の眼▽をもつてすれば△人間の内部の生命▽を直観することができるのである。これこそ『日本文学史骨』で△快樂と費用とは、其的、其結果、其効用に過ぎずして、他に詩の本能ある事は疑ふ可からざる事實▽と言及された詩の本能であり△状態を観察するに先ちて、赤裸々の精神を視ざるべからず、認識せざるべからず、然かる後にその精神の活動を觀察せざる可からず▽と論じられたものである。現象にとらわれずに本質を見極めようとする志向が透谷にあり、その本質直観の方法に透谷の独自性がある。

たとえば『他界に対する観念』（一八九二年）はつぎのように書き出されている。

悲劇必らずしも悲を以て旨とせず、厭世必らずしも厭を以て趣とせず、別に一種の抜く可からざる他界に對する自然の観念の存するものあり、この観念は以て悲劇を人心の情世界に翹へしめ、厭世を高遠なる思想家に迎へしむ、人間ありてよりこの観念なきはあらず、或は遠く或は近く、大なるものあり、小なるものあり、宗教この観念の上に立ち、詩想この観念の糧に活く。

△他界に對する自然の観念▽によつて△悲劇を人心の情世界に翹へしめ、厭世を高遠なる思想家に迎へさせせる。ここでは、悲劇的戀愛を描きつづけていた人情小説や啓蒙家が支持していた政治小説などをのりこえる文学の普遍的価値を△他界に對する自然の観念▽によつて獲得しようという試みがなされているのである。

ここで注目すべきは△悲劇必らずしも悲を以て旨とせず、厭世必らずしも厭を以て趣とせず▽という部分である。透谷によれば、悲劇や厭世を描いた小説は、本来、世を嘆き悲しみそれを厭うことを趣旨とするものではないという。Aは非Aであるという論理的反転によつて、AがAたるそもその所以を問うという透谷の本質直観の方法がみられるのである。

そのような方法は『厭世詩家と女性』（一八九二年）で典型的にあらわれている。女性は△厭世詩家の前に優美美妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辨となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所▽とされている。女性はまったく対立する二面を同時に具有するのである。さらに重要な点は、女性のその二面性が「恋愛」と「姻戚」との違いによつて生じるところである。△恋愛により人は理想の娶合を得、姻戚により想界より實界に擒せられ、死に

よりて實界と物質界とを脱離す√とし「姻戚」という社会制度自体を根本的に疑う視点を獲得している。

そのような視点はほかの作品でもみられる。『鬼心非鬼心』（一八九二年）では、子を殺した母親を△狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり、あわれや子を思ふ親の情の、狂亂の中に隱在すればなるらむ。その狂亂の原はいかに。渠が由でがけに曰ひし一言、深く社會の罪を刻めり√と論じた。母親の狂氣を反弱してとらえなおし、その究極の原因が社会制度にあると見極めた視点こそ當時の人情小説がもち得なかつたものである。透谷はその点をとらえて、状況認識の甘い人情小説家たちにたいして△當代の文學は有望得意なる歡樂者の爲に蓋はれつゝあるなり、余、公等に歡樂者の號を奉りし√△『当世文學の潮模様』一八九〇年と痛罵を浴びせている。そもそも人情小説は現実社会を根本的に批判するような眼をもたなかつたゆえに、みずからの物語性の根拠、つまり、なぜそのような物語が書かれるのか、なぜその物語が読者の支持を得ることができののかを問うような自己言及の契機をもたなかつた。それゆえ、人情小説においては、社会的問題が悲劇の物語の単なる脚色としてしかとらえられなかつたのである。尾崎紅葉の『二人比丘尼色懺悔』（一八八九年）にたいして石橋忍月が△山人請ふ、以來は脚色の爲のみに人物を使用せずして人物の爲に人物を使用せよ√△『新著百種の「色懺悔」』一八八九年と指摘した事態がまさにそれである。

さらにここに、さきにみた『小説神髓』の矛盾の理由もひそんであるのではないか。安易に社会進化論を前提としていた『小説神髓』には、現実の社会認識が根本的に欠如しているために、没理想

の手法で描き出した「人情」がなぜ美といえるのかが不明であるし、付随していた啓蒙主義的目的も達成不可能であつたのである。

他方、政治小説も、透谷の視点を欠落させている。ノベルに接近して人情小説化した政治小説、たとえば『雪中梅』（末広鉄腸、一八八六年）においても同じことがいえる。徳富蘇峰がその登場人物を△純然たる政治世界の「丹次郎」なり√△『近來流行の政治小説を評す』一八八七年と批判したように社会的問題は物語の単なる趣向であり、登場人物はその境遇のもとで△万事方端抜目なく、眞に浮世を渡る利口者√でしかない。そこには、はじめから人間と社会とを冷静に見つめる眼などないのである。また、そのような人情小説化した政治小説にたいする反動として書かれた『浮城物語』も内田魯庵が△幼稚なる物語を以て雄を争はんと欲する√もので△小説の資格なきもの√△『浮城物語』を読む』一八九〇年と痛罵したように、それもまた、透谷の△狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり√という深みのある人間理解には行き着かないのである。そしてさらに、その物語の皮相性は快樂主義的実用に満足していた政治小説が最終的に現実社会の眞なる批判書になりえなかつた原因でもある。透谷もまたその点をとらえて△誰か時代を慮るの小説詩人は無や、滔々たる文學家中、何ぞ一滴の涙を眞に國家の爲に流す者なきや√△『当世文學の潮模様』と批判しているのである。

以後、透谷の認識はさらに深化され、ドストエフスキーを理解するまでに至っている。内田魯庵の翻訳の『罪と罰』（一八九三年）について△最暗黒の社會にいかにおそろしき魔力の潜むありて、學問はあり分別ある脳髓の中に、學問なく分別なきものすら企つることを躊躇ふべきほどの悪事をたくらましめたるかを現はすは、蓋し

この書の主眼なり√(『罪と罰』の殺人罪「一八九三年」と述べている。ここで透谷は社会の現実をたいする厳しい認識を、そしてそれにもとづいて描かれるべき文学の可能性をも提示しているのである。そこで主張されるのが詩人の可能性である。なぜなら透谷の詩人はインスピレーションによつて人間存在の本質であるハヒューマニチー(人性、人情)√を照射する可能性をもち、そしてそれはハ究竟するに善悪正邪の區別は人間の内部の生命を離れて立つこと能はず、内部の生命を語るより外に、出づること能はざる√状況を詩によつて表現することができると考えられるからである。透谷のその認識はハ近代社会の成熟につれて個性と自我とに目ざめた先駆的な文学者たちが、既成の社会秩序や、道徳的な規範からの自由をねがい、個人の絶対化と内面的真実の無条件的な尊重を求めるところに成立した√浪漫主義文学の基調と同じくするところである。

### 三

インスピレーションを考える際、透谷が絶死する年に民友社から『エマルソン』(一八九四年)という研究書を刊行したことからも推測できるように、多大な影響を最後まで彼に及ぼしたエマソンのインスピレーションをふりかえつてみる必要がある。

ヘンリーの『靈感』("Inspiration" in Letters and Social Aims 1875)では、インスピレーションについての定義がある。

詩人が見る自然現象は、必ず彼の精神の経験のうちに、これと対応した事実のあることを、表わしている。詩人は、自然の事実を精神の事実に変える変形をおこない、これを完成する力を自覚する。われわれが、はじめて聞くものは、すべて、精神

が予期していたものであり、最新の発見は、すでに予期されていたのだ。精神のこの拡大された力を、われわれは「靈感」という。偉大なもの、永続的なものは、すべて、靈感によらなければ、密かな前兆に頼らなければ、なされないのだと思う。人間の洞察と力とは、中断されるものであり、時折りしか与えられないものである。

エマソンのインスピレーション概念と透谷のそれとは微妙に異なっている。エマソンにおいては、自然と精神は完全に調和関係にある。それはエマソンの思想全体の根底部分をなす重要なものであるがハ自然のすべての事実、ある精神的な事実の象徴である。自然のあらゆる外貌は、精神の状態に対応している√(『自然』"Nature," 1836)という言葉にその関係が典型的に示されている。

他方、透谷はハ自然われを欺くか、われ自然を欺くか√(松島に於て芭蕉翁を読む「一八九二年」)ハ造化は人間を支配す、然れども人間も亦た造化を支配す、人間の中に存する自由の精神は造化に黙従するを肯ぜざるなり√(『内部生命論』)ときわめて晦渋な表現を使つて自然と人間との関係を表現しており、それはエマソンのような樂觀的調和ではない。そしてこの、自然と精神との関係のとらえ方の違いこそ透谷とエマソンの文学観の相違につながるものと考えられるのである。

たとえば、文学における「快楽」と「実用」との問題もエマソンの立場では容易に解決されてしまう。

実用芸術においては、これが実用に役立つ限り、厳密に、「自然」の法則に従い、「自然」の一種の延長となり、決して矛盾となつてはならないのだが、美を目的とする純粋芸術にお

いても、すべての部分が、「理想的自然」に従うものとされ、個別的なものすべて取除かれて、普遍的魂の所産とされなくてはならない。

『芸術』“Art” in Society and Solitude 1870)

すべての芸術は自然の法則にしたがう、このような発想は人自然の最も高貴な任務は神の顕現として在ることだ(『自然』)という自然への絶対的な信仰と、自然と精神との調和的連関への信頼が存在してはじめてうまれるものである。自然のあらゆる部分には有機的に神とつながり、役立たないものなど何一つない。それと同じように、自然の象徴である精神がうみだす芸術にも実用性のないものなどないのである。そこから人美は実用芸術にもどって来なくてはならない。そして純粹芸術と実用芸術の区別は、忘れられなくてはならない(『芸術』)という芸術論が導きだされるのである。

エマソンの場合、私有財産の保護を重視するがゆえに社会の不平等を引き起こしている法律にたいしても人凡ゆる法律を通して輝く恵み深い必然に、我々は無限の信頼を寄せねばならぬ(『政治について』“Politics” in Essays: Second Series 1844)と安易に肯定する傾向がある。それは人間と自然とが平等に神をめざして調和的な世界を築くというエマソンの思想的楽天的側面といえる。芸術の実用性もまた、何の懷疑もはさまれることもなく唱えられたのである。

エマソンのこのような傾向と近似しているのが山路愛山である。

『頼裏を論ず』(一八九三年)のなかで人文章即ち事業なり。文士筆を揮ふ猶英雄劍を揮ふが如し、共に空を撃つが爲めに非ず爲す所あるが爲也(『と書き記しているように、彼は徹底した功利主義的文

学観をもつのである。

その愛山の文学論のなかで彼の主張をよく表現し、さらに透谷の文学観との比較をするうえで多くのものを示唆すると考えられるのが、彼の松尾芭蕉にたいする評価である。愛山の芭蕉論は『平民的短歌の発達』(一八九二年)においてなされている。愛山は人発句は舊日本の相應する平民の詩なりき(『と発句の意義を限定つきではあるが積極的に認めようとする基本的な考えにたっている。そのうえで愛山は芭蕉を称賛しているのだが、とりわけ、風俗を教化した点において評価が高い。

吾人が殊に驚異するのは彼が善く詩人の意味を解したることなり。彼は常に大隠は市に在りと稱したりき。此一語こそ實に發句の詩人が或る點に於て和歌の詩人、若くは漢詩の詩人に勝れる風俗の源泉を爲す所以を解すべきものなり。何となれば若し詩を以て風俗教化の源となさんとせば、詩人は須らく都會に住むべき筈なればなり。

ここに愛山の文学観がいかなく発揮されている。「実用」のための文学である。それに比して、透谷もまた芭蕉を高く評価しているのだが、その観点はまったく反対のものである。『人生に相渉るとは何の謂ぞ』では、芭蕉の「明月や池をめぐりてよもすがら」という句を引いて論じているが、芭蕉がその句を詠む際に人實を忘れたるなり、彼は人間を離れたるなり、彼は肉を脱したるなり。實を忘れ、肉を脱し、人間を離れて、何處にか去れる。社鵬の行衛は、問ふことを止めよ、天涯高く飛び去りて、絶對的の物、即ち Idea にまで達したるなり(『とこの現象がおこったとするのである。透谷のこの作品は愛山との人生相渉論争のなかで書かれたものであるが、

愛山の「文学Ⅱ実用」にたいするアンチ・テーゼとして、彼は△空の空なる事業▽をなすものとしての文学を主張しているのである。

このように、透谷は「実用」のための文学を否定するのだが、その理由のひとつとして考えられるのは、さきにもたエマソンとは違って、自然と精神との安易な調和が信じられなかったことであろう。透谷は自然と精神とが融合した場所で営まれる人間社会の所与性を信じるのができなかったのである。なぜなら、彼には△君知らずや人は魚の如し、暗きに棲み暗きに迷ふて寒むく食少なく世を送る者なり▽（『時勢に感あり』一八九〇年）という現実認識があったからである。

また、透谷は他方で△海も陸も、山も水も、ひとしく我が心も一部分にして、我れも亦た渠も一部分なり。渠も我れも何物かの一部分にして、歸するところ即ち一なり▽（『万物の声と詩人』一八九三年）と自然と精神の汎神論的調和を描いている作品もある。だが、その場合でも△宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷くるあれば必ずその貴調としての不調和あり▽という永久不変の完全調和を所与のものとしているわけではない。

透谷の「自然」は『人生に相渉るとは何の謂ぞ』でいう△「力」としての自然▽が△眼に見えざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃剣を以て、時々刻々として「肉」としての人間に迫り来る▽性質をもつために、文学が安易に「実用」化されなかったたのであり、△美妙なる自然▽が△現象以外の別乾坤▽という詩人の想像世界で人生に相渉らないものであるという性質をもつために、単純にそれが「快樂」化されることもなかったたのである。

したがって、透谷の「自然」によって文学はついに「快樂」から

も「実用」からも解放された地点に到達できたのである。それはまた当時の文学状況の一切を客観的に見渡せる地点でもある。この地点に立って、透谷は多くの文学評論を書いた。たとえば、『伽羅枕』及び『新葉末集』（一八九二年）では尾崎紅葉と幸田露伴とをそれぞれ△客観的實相▽△主観的心想▽を主眼とする作家としてその小説手法を対比的に論評した。『油地獄』を読む▽（同年）では斎藤緑雨が論じられているが、△広く想像を構へ、複雑なる世界の諸現象を映寫▽するだけではなく、そこから一步踏み込んで△現社界が抱有する魔毒▽を諷刺する文明批評としての文学の可能性を彼にみいだしている。また『徳川氏時代の平民的理想』（同年）や『日本文学史骨』では江戸時代にまで論を拡大して日本文学史の問題を提起している。その一連の作品のなかで、透谷の最大の主張として、文学が真に目的にすべきものは「精神の自由」であると結論されるのである。

唯だ讀者の記憶を請んとすることは、斯くの如く發達し來りたる平民的思想は、人間の精神が自由を追求する一表象にして、其の歸着する處は、倫理と言はず放縱と言はず、實用と言はず快樂と言はず、最後の目的なる精神の自由を望んで馳せ出でたる最始の思想の自由にして、遂に思想界の大革命を起すに至らざれば止まざるなり。

（『日本文学史骨』）

## 結

一八八〇～九〇年代の文学状況をふりかえりながら、透谷の詩人論を検討した。当時の論争やエマソンの文学論を比較資料として同

時に検討したが、つぎのことが結論できる。

第一に、透谷はインスピレーション概念によって、リアリズムの一方を得、それによって同時代の文学を批判し、新しい文学の可能性を提示したことが挙げられる。彼のリアリズムとは、Aは非Aであるという論理的反転によって生ずる懐疑において、事態の本質を照射する認識方法である。

だが、インスピレーション概念にその方法の根拠を求める点に、勝本清一郎氏が指摘したように、透谷文学の理解不可能な神秘的性質が認められるとして批判されよう。<sup>(9)</sup>しかしながら、文学における想と実とが模索されていた一連の想実論争のなかで、透谷のその方法が、現実を相対化してとらえるための一つの概念装置として機能したことを積極的に評価できよう。

第二に、透谷は「自然」認識にもとづいて、文学を「快楽」と「実用」との束縛から解放した。そこで作品世界における想像力の意義を主張し、「精神の自由」を確保したことが挙げられる。人間の精神性の尊重とその自由の保証が叫ばれはじめたのである。作家の内的世界の確立にもなった、いわゆる浪漫主義文学の誕生である。しかし、透谷が八出でよ詩人、出でよ眞に國民大なる思想家。外來の勢力と、過去の勢力とは、今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり。歛くところのものは創造的勢力√〔國民と思想〕一八九三年」というときそこには別の要因がからんでくることになり、あらためて詳細に論じられなければならない。

最後に、このような浪漫主義文学的な「批評」を確立した透谷の文学からつぎのようなことが結論できる。文学作品にとって、批評される基準はそれが何を目的にして書かれているかではない。つま

り「快楽」「実用」論議では作品の質を評価し得ないのである。重要なのは、本質を観取するリアリズムを作者が確実に獲得しているか、またそれが作品のなかで充分に達成されているかどうかが見極められなければならないのである。

注

文中、北村透谷、坪内逍遙、矢野龍溪、石橋忍月、徳富蘇峰、山路愛山、斎藤緑雨の引用は『明治文学全集』（筑摩書房）から、またエマソンは『エマソン選集』（日本教文社、斎藤光訳）から引用した。

(1) 柳田泉「矢野龍溪の『浮城物語論争』について」(『政治小説研究』下、一九三九年、春秋社)

(2) 越智治雄『浮城物語』とその周囲」(『矢野龍溪集』『明治文学全集』一五)一九七〇年、筑摩書房)

(3) 笹淵友一『文学界』とその時代』上、第一章北村透谷、第七節文学観―透谷の思想 その五―(一九五九年、明治書院)

(4) 尾崎行雄は『雪中梅』下篇序文(一八八六年)で、『雪中梅』が人情を基本として八一言一行悉く根底を世間實在の事態に占め√るノベルの範疇に入る作品で八政治小説中の最も時事に適切な者√とした。

(5) 猪野謙二『明治の作家』(一九六六年、岩波書店)

(6) ここで透谷は「造化」に八ネーチャユ√とルビを振っていることから、それはエマソンの「自然」(Nature)と同じものを指しているといえる。

(7) 北川透「北村透谷試論Ⅱ 内部生命の砦」(一九七六、冬樹社)「内部生命の構造」(四)「八力√としての自然」ではつ

ぎのように述べられている。

△内部生命√の概念は、この人間の自然性、△「力」としての自然√という概念ときびしい拮抗において構築されるをえない。

(8) 笹淵友一、前掲書、第一章「北村透谷」第三節では△エマースンの「歴史観」においては人間精神は歴史に対してその演繹的能力をいささかの凝滞もなく実現してゆく。しかし透谷においては至粹はタイムのために控縛され、そのために社会は「ヂスコンテンション」が生まれる。ここに透谷における二元論の深さがある√と述べている。

(9) 勝本清一郎「近代の挫折」(『近代文学ノート』二、一九七九年、みすず書房) 勝本氏はさらに△日本における近代の挫折の精神的基盤の構造が、透谷の場合に最も純粹にはっきり見られる√としている。

(付記) 本稿は、平成三年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において口頭発表したものに加筆修正したものである。席上、貴重な御助言を賜りました諸先生方、さらに後日、懇切な御教示を賜りました槇林晃二先生に厚く御礼申し上げます。論をなすにあたって終始、相原和邦先生より暖かい御指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

— 本学大学院博士課程在学 —